

■ I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

本調査では、(財)地域創造が1995年度に実施した調査結果から、積極的にボランティア活動を導入していると思われる事例約60件を抽出し、ボランティア導入の経緯や活動内容、人数、現在の問題点、課題等に関するアンケート調査を実施した。また、その調査結果から7つの事例調査対象施設を抽出し、館側へのインタビュー調査、ボランティア参加者へのアンケート調査及びインタビュー調査を実施した。

本章では、これらの調査結果に基づき、まず社会教育調査なども参考にしながら、公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況を概観したうえで、ボランティア制度導入の経緯、具体的なボランティア活動の内容、運営方法など、公共ホール・劇場におけるボランティア活動の実態と課題を分析・整理する。

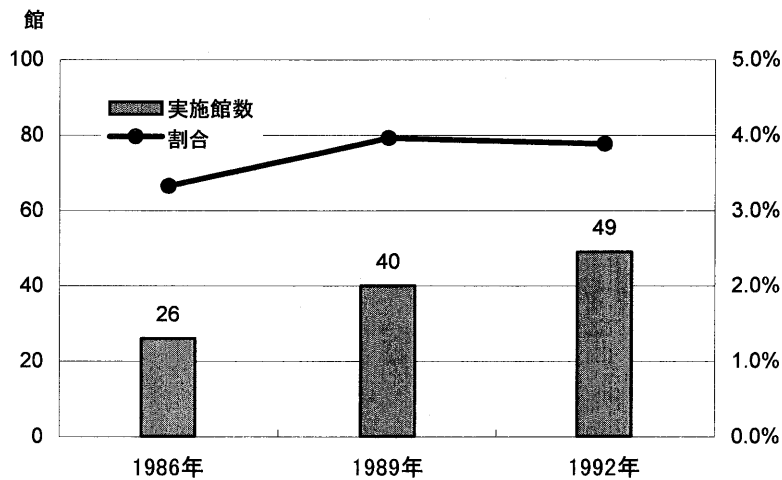
1. ボランティア制度の導入状況

(1) ボランティアを採用する公共ホール・劇場

文部省が3年ごとに実施している「社会教育調査」によると、文化会館でのボランティアの採用状況は、図表 I -1及び2のとおりである。

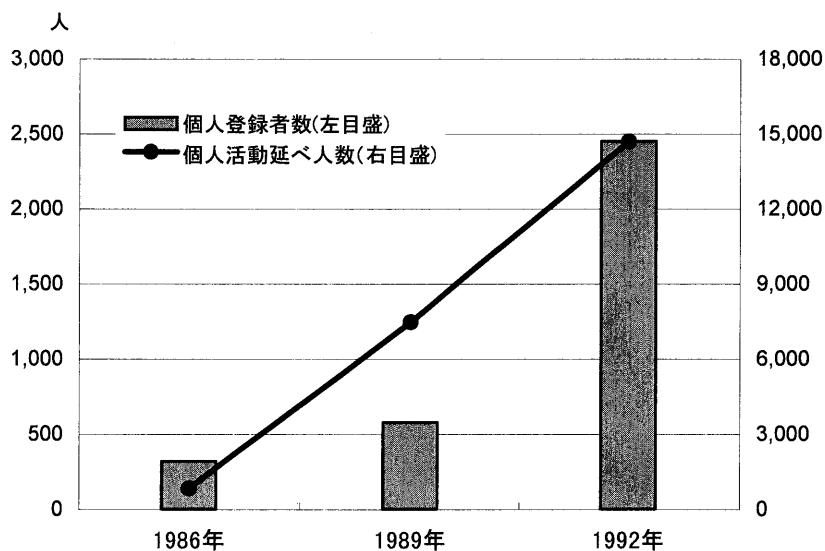
1992年度の調査結果によると、調査対象となった文化会館1,261館のうち、ボランティア制度を採用している館は49館で、全体の4%弱。86年以降の推移をみると、ボランティア制度を採用している施設数は増加しているが、文化会館そのものの数も急増し

■ 図表 I -1 文化会館におけるボランティアの導入館数の推移



資料:社会教育調査報告書 | 文部省 | 1987,90,93年度版より作成

■ 図表 I -2 文化会館におけるボランティアの個人登録者数と活動延べ人数



資料:社会教育調査報告書 | 文部省 | 1987,90,93年度版より作成

ているため、ボランティア制度を採用している館の割合はほぼ横ばいの状態が続いている。

同じく1992年度の登録ボランティアの団体数は209、団体の登録者数は約1万4,000人、延べ活動人数は約2万4,000人、また個人の登録者数は2,450人、活動延べ人数は約1万5,000人となっている。個人登録者の推移をみると、登録者数、活動延べ日数とも急増しており、文化会館におけるボランティアの活動が、近年急速に活発になっていることがわかる。

一方、(財)地域創造が、1995年9月に全国の公共ホール・劇場を対象に実施したアンケート調査(1,964館に送付、有効回収数1,170館)によると、ボランティア制度を導入している館は183館で全体の16.4%と、6館に1館が何らかの形でボランティアを導入している(社会教育調査の結果との違いは、ボランティア業務の範囲及び調査対象の違いなどによるものと考えられる)。

業務の内容は、受付・案内業務が最も多く、ボランティアを採用している館の6割以上の館で導入されている(「地域における芸術環境づくりの状況 | (財)地域創造 | 1996年3月」参照)。

(2) ボランティア制度の概要

今回の調査では、上記の地域創造の調査結果から、受付・案内業務だけにボランティアを導入している館を除外することによって、積極的にボランティアを導入していると思われる館を抽出し、そのボランティア制度の内容や現在の課題、問題点等について、館側へのアンケート調査を実施した(57館を対象に実施、有効回答43館)。

このアンケート調査の結果から、現在の公共ホール・劇場で導入されているボランティア制度の概要を整理すると次のとおりである。

① ボランティアの導入時期

調査事例のボランティア導入時期をみると、ほとんどが、1990年以降の導入となっており、公共ホール・劇場におけるボランティア制度が新しいものであることがわかる。

② ボランティアの位置づけと業務内容

ボランティアの位置づけとしては、年間運営に対するボランティアが17館、個別事業に対するボランティアが22館とほぼ半々であった。

アンケートでは、図表 I-4に示したように業務の内容を、

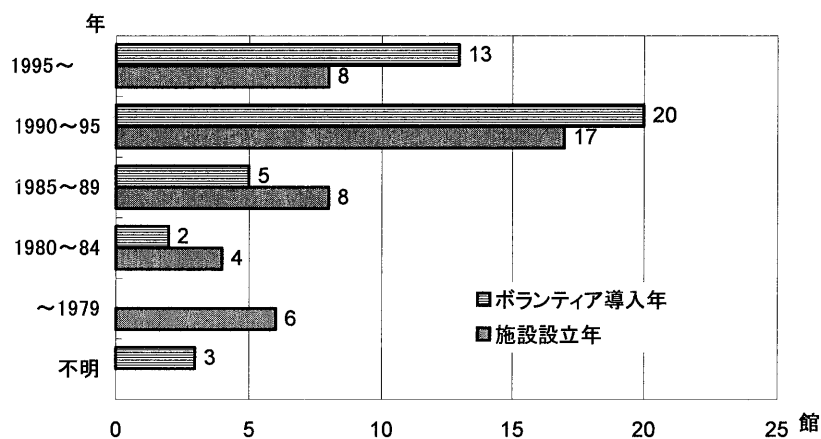
- ・企画・制作
- ・広報・宣伝
- ・舞台・音響・照明(ウラ方)
- ・もぎり・客席案内(オモテ方)
- ・教育普及活動

I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

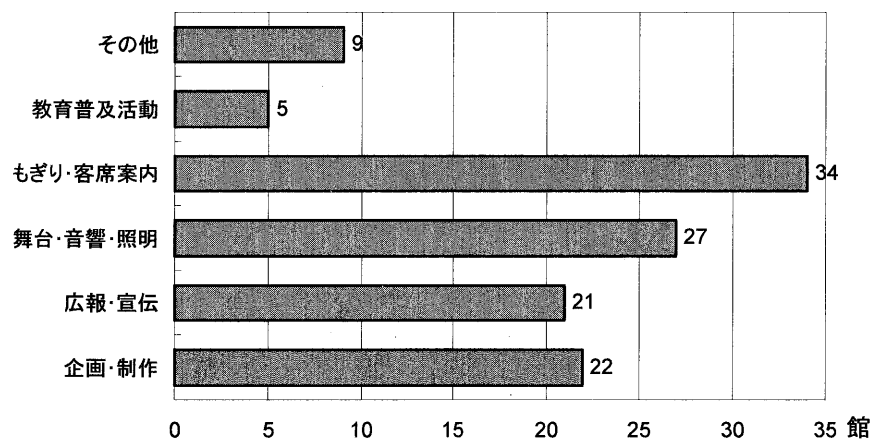
の5つの分野に分けて調査したが、最も多くの館が採用しているのは、もぎりや客席案内などのオモテ方業務であり、ワークショップやシアターガイドなどの教育普及活動にボランティアを採用している施設は少数であった。その他業務としては、託児や乳幼児の一時預かりのボランティアを導入している館があった。

また、多くの館では複数の分野にわたってボランティア制度が導入されており、教育普及活動を除く4つの活動すべてにボランティアを導入しているところは16館にのぼる。

■ 図表 I -3 ボランティア制度の導入時期



■ 図表 I -4 ボランティアの業務内容



注:複数回答

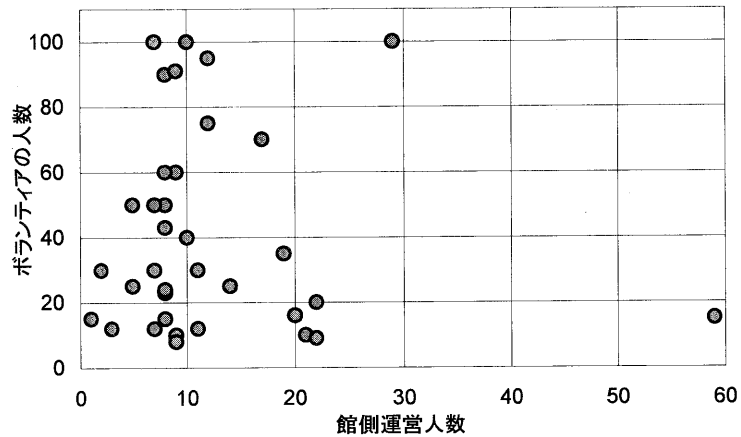
③ ボランティアの人数

ボランティアの人数については、まちまちで、オモテ方のボランティアを導入しているところでは、100名以上のボランティアが登録されているところもある。

ボランティアの登録人数と館側の組織人員との相関関係は図表 I -5に示したと

おりである。サンプル数が少ないこともあり、両者の間に相関関係を見ることはできなかったが、調査対象の半数以上の館で、館側の運営体制が10人以下となっており、スタッフ不足がボランティア導入の一因となっていることが伺える。

■ 図表 I -5 ボランティアの人数と館側の組織体制



注:ボランティアの登録人数が100名を越える事例は割愛した

④ 募集方法、研修、実費支給等

ボランティアの募集方法は、43館のうち大半の27館が公募、口コミが8館、行政からの依頼や講座受講者、観賞団体メンバーからの選出などその他が8館であった。ボランティアの任期を設けている館(半年～2年間)は12館あったが、すべての館で継続可能となっている。任期に関しては明確な方針のないところがほとんどで、導入されて間もなく、制度面での考え方がはっきりしていない状況が伺える。

また、ボランティアに対する研修は、半数以上の26館で実施されており、その内容は、先進事例視察、技術研修講座などが多い。交通費等の実費支給については、約半数で実施されている。

ボランティア運営の担当者は、兼務のところが多かったが、7館で専従スタッフが対応していることは注目される。

■ 図表 I -6 ボランティアの運営方法 (館)

募集方法	公募	口コミ	その他
	27	8	8
研修	あり	なし	不明
	26	15	2
実費支給	あり	なし	不明
	19	22	2
運営担当者	専従	兼務	不明
	7	28	8

(3) ボランティア参加者の横顔

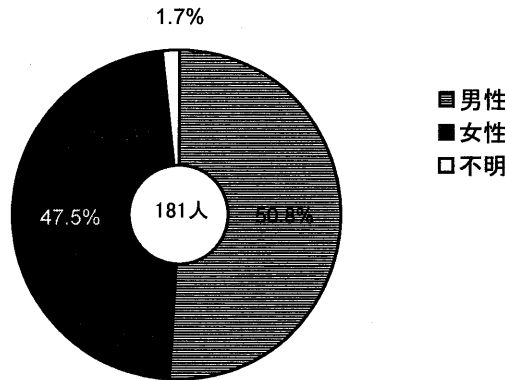
今回の調査では、7つの事例調査対象のボランティア参加者に対して、参加の動機や活動状況、満足度や要望等に関するアンケート調査を実施した。それによるとボランティア参加者の横顔は次のとおりとなっている。なお、このアンケート調査は、7施設のボランティア約180名を対象にしたもので、必ずしも、公共ホール・劇場のボランティア全体の傾向を示すものではないことを断っておきたい。

①性別・年齢

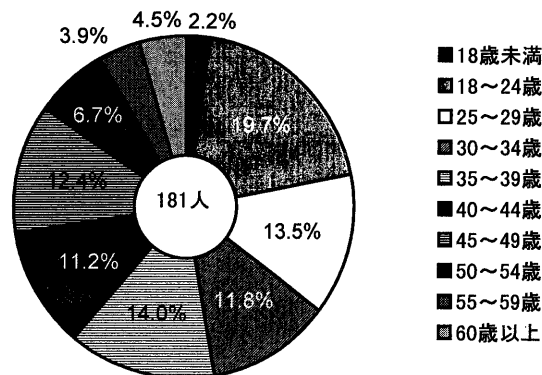
ボランティア参加者の男女比はほぼ半々。年齢構成をみると、18～24歳が19%、25～29歳が13%と30歳未満の割合が全体の3分の1を占めているが、一方では45歳以上の人でも全体の4分の1以上を占めており、幅広い年齢層にわたってボランティア活動に参加していることがわかる(図表 I-6,7)。

美術館におけるボランティアは、女性が91%を、また40歳代から60歳代が83%をそれぞれ占めている*1ことと比較すると、公共ホール・劇場におけるボランティアは、性別、年齢とも幅広い層の人々が参加していることがわかる。

■ 図表 I-7 ボランティアの性別



■ 図表 I-8 ボランティアの年齢



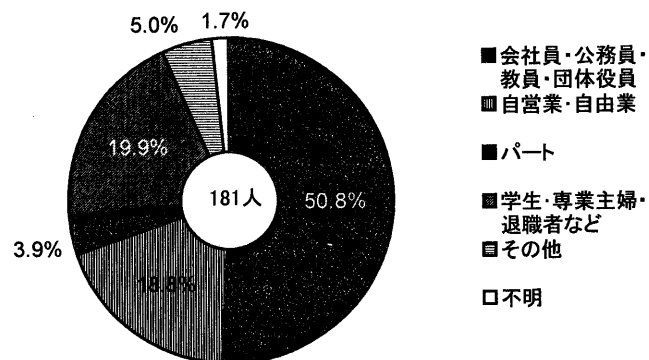
*1 文化行政とボランティアに関する調査報告書 | 東京都生活文化局 | 1994年5月

② 職業

一方職業については、「会社員・公務員・教員・団体職員」が50.8%とほぼ半数を占めており、「自営業・自由業」の18.8%、「パート」の3.9%を含めると、4人に3人が有職者になっている。

美術館のボランティアでは有職者率が27%、無職が69%となっていたことと比較して(前掲調査)、公共ホールや劇場では、職業の点でも幅広い層の人々がボランティアとして活躍していることがわかる。

■ 図表 I -9 ボランティアの職業



2. 国内の公共ホール・劇場におけるボランティア活動の実態と課題

国内の公共ホール・劇場におけるボランティア活動の実態を把握するため、インタビュー調査を実施した。インタビューに際しては、前節のアンケート結果に基づき、地域特性、ボランティアの業務内容、導入時期などを勘案し、以下の7ヶ所を選定した*2。

- ・喜多方プラザ文化センター：ウラ方業務に特化した「舞台研究会うらかた」を10年以上前から導入
- ・中島町文化センター・能登演劇堂振興協会：「無名塾」とタイアップした劇場づくりで地域振興を図るボランティア
- ・武生市文化センター／武生国際音楽祭：市民主導のボランティアによって企画・制作から運営までが行われる音楽祭
- ・いまだて芸術館：住民参加型の企画システムウラ方ボランティアによるアシスタント・エンジニアスタッフ委嘱システムを採用
- ・大阪府立青少年会館・プラネットステーション：青少年の健全育成を目的に青少年プロデューサーとボランティアによる事業運営
- ・たんば田園交響ホール：オモテ方、ウラ方、企画・制作の多分野にボランティアを導入
- ・春日市ふれあい文化センター：地域の若者を中心にした運営サポートおよび企画・制作グループとしてのボランティア

また、前述したとおり、インタビュー調査を実施した事例のボランティア参加者に対しては、事前にアンケート調査を実施した。この調査は、インタビュー時に出席できないボランティア参加者の意識なども含め、事例調査対象の活動の実態をより幅広く把握するために行ったもので、サンプル数は約180名という限られたものであることを了承されたい。

(1) ボランティアの運営方法

まず、公共ホール・劇場の担当者からみたボランティアの実態について述べてみたい。

① 導入の経緯と背景

調査対象となった7事例では、そのほとんどが施設の設立以前あるいはほぼ同時期にボランティア制度を導入している。その経緯に関しては、劇場・ホール主導で導入されたものと、民間からの働きかけによって導入されたものとに分類できる。

● 劇場・ホール主導型

- ・「喜多方プラザ文化センター」や「たんば田園交響ホール」のように、ボランティアが舞台・音響・照明などウラ方業務を担っている事例では、人材不足が導入の主な理由と言える。ホール職員ではウラ方業務に対応しきれないものの、地元にもウラ方専門業者がなく、また都市部の業者に委託するだけの経

*2 それぞれのボランティア制度や活動の内容は、巻末の事例調査資料に整理した。

費が確保できない、という地方都市特有の問題が背景にある。

- 「大阪府立青少年会館・プラネットステーション」や「春日市ふれあい文化センター」では、ボランティア・スタッフの対象を“青少年”に限定している。「プラネットステーション」は、主催事業の企画を青少年プロデューサーの提案にもとづいて実施しており、その企画の具体的な運営業務そのものも青少年の手に委ねて行うために、ボランティア制度が導入された。一方、春日市は福岡市のベッドタウンという性格のため、住民の定住率が低いことや昼間人口に占める若者層の割合が低いことなどから、地域住民の顔がみえる運営方法を検討するなかで、ボランティア・スタッフを30歳未満とした経緯がある。
- 「いまだて芸術館」のボランティア制度導入には、“住民参加”による運営を目指した初代館長の意図が反映されている。「いまだて芸術館」に限らず、「たんば田園交響ホール」や「春日市ふれあい文化センター」でのボランティア導入の背景にも、担当者の“地域住民によるホール運営”を目指す姿勢が感じられる。

○ 民間主導型

- 一方、武生国際音楽祭の運営をささえる「武生国際音楽祭推進会議」では、1990年の「フィンランド音楽祭 in 武生」が開催される際、武生市の呼びかけで集まった商工会議所、青年団、婦人会など地元各種団体の代表者が、2回目以降も音楽祭を継続するため、民間主導で実行委員会を組織した。
- 「能登演劇堂振興協会」は、10年以上続いた無名塾との関係が基礎になった「能登演劇堂」の建設を機に、“能登演劇堂の活用を促進し、地域の芸術文化の高揚に寄与する”ことを目的に設立された団体。無名塾との関係ももともと民間レベルで行われており、協会も民間が中心となっており、町内の約30の各種団体に働き掛け設立に至っている。

② ボランティア組織の位置づけ

ボランティア組織は、その運営主体から「劇場・ホール付属型」と「運営自立型」に分類できる。

○ 劇場・ホール付属型

- 「いまだて芸術館」では、「企画プロデューサー」が提案した企画が「いまだて芸術館」の自主事業として位置づけられており、事業の一環として劇場・ホールに付随した形で運営されている。また、「AE(アシスタント・エンジニア)スタッフ」も劇場・ホールに付随したかたちで活動している。
- 「いべんとスタッフ(大阪府青少年会館・プラネットステーション)」が関わる事業や「K's Crew(春日市ふれあい文化センター)」のが行っている活動も、施設の主催事業の一環として位置づけられており、施設に付随したかたちで運営されている。

I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

- ・「レディースi」や「レディース21」も「たんば田園交響ホール」に付属した形で運営されている。

○ 運営自立型

- ・「ステージオペレータークラブ(たんば田園交響ホール)」、「舞台研究会うらかた(喜多方プラザ文化センター)」は、ホール主導で始まってはいるものの、任意団体として自立しており、館とは委託契約を結んでいる。導入の経緯は劇場・ホール主導型だが、運営の現状から言えば運営自立型と言える。「ステージオペレータークラブ」は、ホールの自主事業、貸し館事業の際のウラ方業務だけでなく、ビデオ録画などの業務も受託している。
- ・前述のとおり、「能登演劇堂振興協会」は民間主導で設立され、中島町内の各種団体の代表者を中心とした任意団体。現在の会員の所属は、民間団体9名、公的団体6名、社会教育団体5名、行政2名、民間個人3名という構成で、民間・各種団体・行政が一体となった、いわば“町ぐるみ”の運営である。
- ・「武生国際音楽祭推進会議」は第1回目音楽祭開催の際に自治体の要請で集ったメンバーを中心とする任意団体である。「武生」の場合、音楽祭自体は厳密には「武生市文化センター」の自主事業ではなく、独立した組織が開催する事業のひとつという位置づけで、センターとは一定の距離を置いている。

③ ボランティア組織の運営

○ 運営予算

組織が劇場・ホール付属型である場合には、基本的な運営には劇場・ホール側の予算が充当されている。

一方、ボランティア団体が任意団体として独自に運営されている場合には、おのおの下記のような運営方法が採られている。ただし、いずれの場合も事務局や活動の拠点は当該劇場・ホール内に置かれている場合がほとんどである。

- ・「喜多方プラザ文化センター」の「舞台研究会うらかた」は、おもに会費、喜多方プラザからの委託料、手数料によって運営されている。
- ・「たんば田園交響ホール」の「ステージオペレータークラブ」も規約が制定されており、会員は年間6,000円(月500円)の会費を納めている。会の運営は会費の他、ホールの自主事業、貸し館事業の際のウラ方業務、その他の受託事業、および町からの補助金によって主に賄われている。メンバーの出役に対する費用弁償は、各事業の主催者から一旦「オペレータークラブ」に支払われ、そこから各メンバーに“費用弁償費”として支払われている。その他、メンバーの技術研修や資格取得のためにも、会から補助が出る仕組みになっている。
- ・同じく任意団体である「能登演劇堂振興協会」は、町からの委託料、賛助会員による賛助金、広告料およびその他の収入で運営されている。

- ・「武生国際音楽祭推進会議」では、ボランティア団体の会費(年間5,000円)を設定している。これは事務局の運営経費で、音楽祭の会計とは分けて経費処理されている。

● ボランティア・コーディネーター

ボランティア参加者と劇場・ホール側のスタッフをつなぐ、あるいはボランティア内部の調整をするボランティア・コーディネーターの状況は下記のとおりである。

- ・「舞台研究会うらかた(喜多方プラザ文化センター)」では、舞台、音響、照明業務がおのおの部門別になっており、各部の部長が部内のとりまとめ役になっている。ホール側には技術スタッフが3名おり、彼らがウラ方業務の調整を行う。
- ・「いまだて芸術館」、「たんば田園交響ホール」および「春日市ふれあい文化センター」では、いずれもホール側の担当者がボランティアを取りまとめており、その担当者がボランティア運営のキーパーソンになっている。ただし、「いまだて」では企画プロデューサーが当該企画を実際に運営するところまでの責任者に位置づけられており、「春日市」では“キャプテン”と呼ばれている人がボランティア間の連絡調整を行っている。
- ・「能登演劇堂振興協会」は、事務局を町の文化振興課担当者が兼務するかたちになっている。協会の会長は、10年以上前に無名塾との個人的なつながりを持っていて、演劇堂建設のため中心的な役割を果たした人物で、現在も主体的に関与している。
- ・「武生国際音楽祭推進会議」では、事務局が武生市文化センター内に設置されているが、専従スタッフはいない。事務局長がとりまとめ役になっている。専任事務局員を雇ったこともあるが、常駐スタッフがセンターにいと、従来ボランティアで行ってきた仕事をその人に依存してしまうようになり、結局はうまく機能しなかった。
- ・いわゆる“ボランティア・コーディネーター”が専従のスタッフとして置かれているのは、調査事例のなかでは「大阪府立青少年会館・プラネット・ステーション」のみである。高校生・大学生中心の「いべんとスタッフ」の活動は夕方以降が主になるのに対し、府立青少年会館職員の勤務時間は必ずしもそうでないことなどから、双方のコミュニケーションを密にするために“制作チーフ”という肩書きでコーディネーターを置き、効果的に機能している。

④ ボランティアの業務の内容

次にボランティアの業務内容をみると、図表 I -10のように、企画制作から事務補助まで多様な内容になっており、ホール・劇場で行われている業務のほぼ全般にわたってボランティアが関わっていることがわかる。また、181名の回答者による複数回答が計397件となっていることから、一人のボランティアが平均して二種類

I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

以上の業務に携わっている状況も見て取れる。

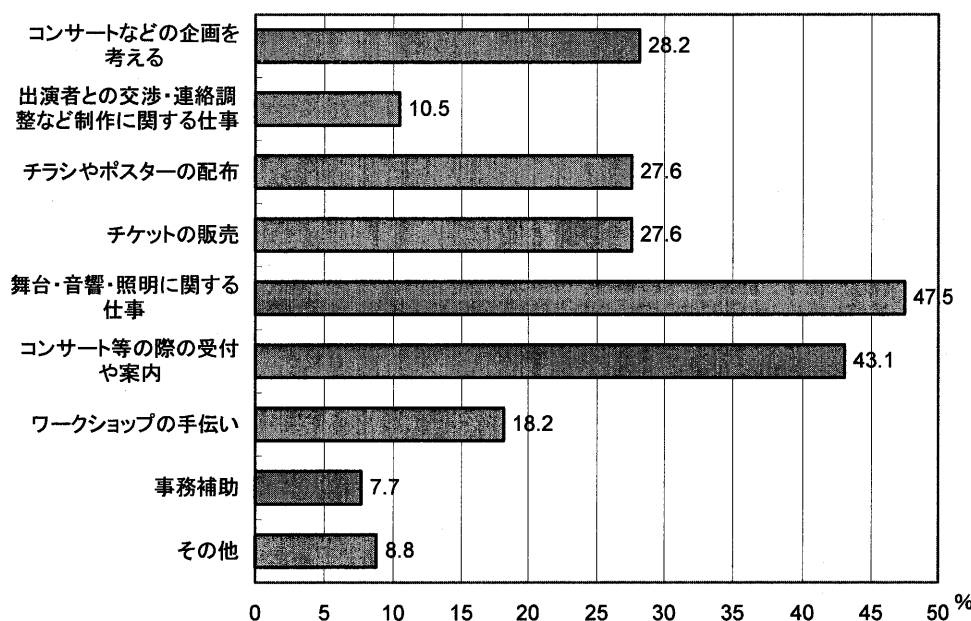
また、次頁図表 I-11 でみられるように、ボランティアの対象事業や業務内容は個々の施設ごとにまちまちで、施設の運営状況に見合った形でボランティアが導入されていることがわかる。図表 I-11 の横軸は、左方向が「公演の運営サポート」（オモテ方、ウラ方など）で、右方向に行くにしたがって企画・制作から広報、資金調達などの内容が多くなる。また、縦軸はボランティア活動の対象として下方方向に行くほど、地元（アマチュア）文化団体の公演活動に対するサポート的性格が強く、上方方向に行くにしたがって、館の主催する（プロ）芸術団体の公演事業に対するサポート・運営的要素が強くなることをあらわしている。

以下、これらの業務内容を、劇場・ホールとの関係で見てみることにする。

● 運営サポート型

- ・「事務補助」や「ワークショップの手伝い」、あるいは「コンサート等の際の受付や案内」など、劇場・ホール側の業務を補助・補填する形でのサービスを提供するもので、館側の人手不足・予算不足を補う意味で重要な役割を果たしている。特に、「コンサート等の際の受付や案内」いわゆる「オモテ方」の業務には43.1%が携わっており、ボランティアへの依存度が高いことを示している。
- ・また、舞台・音響・照明などの「ウラ方」業務に携わるボランティアも、47.5%と高い数字を示しており、劇場・ホール運営における重要な位置を占めていることがわかる。特に「ウラ方」業務には専門的な知識や経験が必要とされ、館側の人手不足・予算不足を補うという意味では運営サポート型ではあるが、特に専門的知識を要するという意味では、専門技術提供型とも言えよう。

■ 図表 I-10 ボランティアの業務内容



■ 図表 I-11 ボランティア活動の対象事業と業務内容

凡例	喜多方プラザ文化センター
<p style="text-align: center;">縦軸：ボランティアの対象事業</p> <p style="text-align: center;">館の主催する(プロの)芸術団体の公演事業に対するサポート・運営</p> <p style="text-align: center;">自主事業(招聘事業)</p> <p style="text-align: center;">公演の運営(オモテ・ウラ)</p> <p style="text-align: center;">客席案内等におけるボランティア活動</p> <p style="text-align: center;">企画・制作(広報)</p> <p style="text-align: center;">企画・制作や広報、あるいは資金調達等におけるボランティア活動</p> <p style="text-align: center;">横軸：ボランティアの業務内容</p> <p style="text-align: center;">地元文化団体の活動</p> <p style="text-align: center;">地元(アマチュアの)文化団体の公演活動に対するサポート</p>	<p style="text-align: center;">自主事業(招聘事業)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● あぐだもぐだ ● 音を楽しむ会 ● 演劇鑑賞会 <p style="text-align: center;">公演運営(オモテ・ウラ)</p> <p style="text-align: center;">企画・制作(広報)</p> <p style="text-align: center;">● 舞台研究会 うらかた</p> <p style="text-align: center;">地元文化団体の活動</p> <p>ウラ方に特化したボランティアとしては草分け的存在。複数のジャンルの市民鑑賞団体も組織され企画面で協力している。</p>
<p style="text-align: center;">いまだて芸術館</p> <p style="text-align: center;">自主事業(招聘事業)</p> <p style="text-align: center;">公演運営(オモテ・ウラ)</p> <p style="text-align: center;">● AEアシスタント・エンジニア</p> <p style="text-align: center;">● 企画プロデューサー委嘱システム</p> <p style="text-align: center;">企画・制作(広報)</p> <p style="text-align: center;">地元文化団体の活動</p> <p>企画プロデューサー委嘱システムにより、館の運営全体に幅広い市民参加の方法を採用。技術スタッフのアシスタントもボランティアが担う。</p>	<p style="text-align: center;">自主事業(招聘事業)</p> <p style="text-align: center;">公演運営(オモテ・ウラ)</p> <p style="text-align: center;">● イベントすたっふ (チーフすたっふ)</p> <p style="text-align: center;">企画・制作(広報)</p> <p style="text-align: center;">地元文化団体の活動</p> <p>青少年の健全育成という観点から、館の自主事業として青少年の企画を採用し、企画から運営までを若者のボランティアで行う。</p>

I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

中島町文化センター・能登演劇堂	武生市文化センター／武生国際音楽祭
<p>自主事業(招聘事業)</p> <p>・能登演劇堂友の会 ・資金調達</p> <p>●能登演劇堂振興協会</p> <p>企画・制作(広報)</p> <p>公演運営(オモテ・ウラ)</p> <p>自主事業(招聘事業)</p> <p>●客席案内ボランティア ●舞台芸術アカデミー</p> <p>地元文化団体の活動</p> <p>「無名塾」との密接な関係をベースに、市民主導で劇場を設置、その自主事業の企画、広報、協賛金調達を担う。オモテ・ウラは別途ボランティア対応。</p>	<p>自主事業(招聘事業)</p> <p>●武生国際音楽祭推進会議</p> <p>企画・制作(広報)</p> <p>公演運営(オモテ・ウラ)</p> <p>自主事業(招聘事業)</p> <p>・資金調達</p> <p>地元文化団体の活動</p> <p>市民主導で組織された任意団体が、国際音楽祭の企画から運営までを行うほか、理事会が資金調達と協賛によって事業収支の責任も持つ。</p>
たんば田園交響ホール	春日市ふれあい文化センター
<p>自主事業(招聘事業)</p> <p>●レディース21</p> <p>企画・制作(広報)</p> <p>公演運営(オモテ・ウラ)</p> <p>自主事業(招聘事業)</p> <p>●ステージ・オペレータークラブ ●レディースI</p> <p>地元文化団体の活動</p> <p>舞台・照明・音響のウラ方、客席案内等のオモテ方、女性の企画集団など、それぞれ役割を特化した複数のボランティア制度を導入。</p>	<p>自主事業(招聘事業)</p> <p>●K's Crew</p> <p>企画・制作(広報)</p> <p>公演運営(オモテ・ウラ)</p> <p>自主事業(招聘事業)</p> <p>・公演サポート ・企画協力</p> <p>地元文化団体の活動</p> <p>若者のボランティアグループを組織し、公演のサポート業務と企画制作業務の両方を別々の業務として実施している。</p>

・この「ウラ方」業務をボランティアが担うのは、地元芸術団体に対する貸館事業のみの場合と、プロの公演にも対応する場合とがあり、現状では前者のほうが主流である。いまだて芸術館の「AEスタッフ」やたんば田園交響ホール「ステージオペレータークラブ」は館の自主事業と貸館事業の双方に対応している*³。

● 企画・制作型

- ・「コンサートなどの企画を考える」(28.2%)、「出演者との交渉・連絡調整など制作に関する仕事」(10.5%)あるいは「チラシやポスターの配布」(27.6%)など、いわゆる“企画・制作”に関わる業務に携わっているボランティア参加者も3割近く見られる。
- ・美術館ボランティア*⁴では、事業の企画にまでボランティアが関与している例はほとんど見られず、劇場・ホール系ボランティアに特徴的な現象である。
- ・業務の具体的な内容については、「武生国際音楽祭推進会議」のようにプロの芸術家や芸術団体を招聘しているものから、「いまだて芸術館」の「企画プロデューサー」、「大阪府立青少年会館／プラネット・ステーション」の「いべんとスタッフ」のように、市民から提案された「企画」をボランティアで実現させる、主に地元(アマチュア)文化団体を対象にしたものまで幅広い。
- ・住民参加のニーズにあった企画を積極的に推進しているという見方ができる一方で、限られた自主事業費で実現可能な企画を市民のアイデアに依存しているという考え方もできる。

● 財政サポート型

- ・「チケットの販売」を行うボランティアは27.6%いたが、それだけでなく、「武生国際音楽祭推進会議」や「能登演劇堂振興協会」のように、鑑賞団体としての「友の会」運営や地元の民間企業からの寄付金集め、あるいは個人的な寄付などを行っている事例も見られる。劇場・ホールの運営や事業の推進にとつての、経済的なサポートをするという意味では、米国の非営利団体における理事会*⁵的な存在にも類似しており、今後の可能性を探るうえでも非常に興味深い。

*³ 図表 I -11 参照

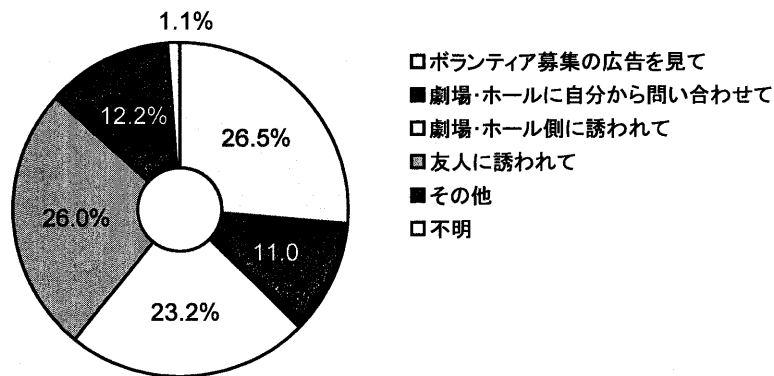
*⁴ 美術館ボランティアについては、「文化行政とボランティアに関する調査報告書 | 東京都生活文化局(1994年)」に詳しい。主な業務内容は、「監視・会場整理」、「展示品の解説」、「環境整備・清掃等」など、ここで言う運営サポート型にほぼ限定されている。

*⁵ 米国の文化施設のほとんどは非営利団体によって運営されており、そこでの理事会の役割は「組織の存続の確保、全体の方向性・ポリシーの策定、有給スタッフの雇用」など。また「組織サービスの受益者、資金提供者、関係省庁・同業団体などさまざまな外部関係者との接点であると同時に、内部においては有給スタッフを統括する組織の責任者」。前掲の「文化行政とボランティアに関する調査報告書」P. 62に詳しい。

⑤ 募集方法

ボランティアの募集方法については、導入の経緯や業務内容によってさまざまな方法がみられる。

■ 図表 I -12 ボランティアを始めたきっかけ



○ 公募、口コミ方式

- ・「喜多方プラザ文化センター」、「武生国際音楽祭」、「春日市ふれあい文化センター」などで見られるように、導入当初は自治体の広報誌や劇場・ホールの機関紙による公募のケースが最も一般的である。ボランティアを始めたきっかけを参加者の側からみてみると、「ボランティア募集の広告をみて」(26.5%)が最も多い。
- ・一方で、「ボランティアをしないかと劇場・ホール側に誘われて」(23.2%)も高い数字を示しており、“地域住民個人の顔が見えている環境”であればこそ、という状況も見られる。
- ・また、「友人に誘われて」始めた人も26.0%と多く、一旦ボランティアが導入された後は、既に活動を行っているボランティア参加者の“口コミ”で参加する人の層も無視できない。

○ 企画提案方式

- ・「いまだて芸術館」の企画プロデューサーや「大阪府立青少年会館／プラネット・ステーション」の「ちーふスタッフ」など、企画・制作型ボランティアの場合には、劇場・ホールの自主事業として“企画”そのものを募集し、それが採用されることが、ボランティアでその企画を実際に運営することにつながる。

○ 団体代表者方式

- ・ボランティア団体の設立が自治体側からの要請による「能登演劇堂振興協会」や「武生国際音楽祭推進会議」の前身「フィンランド音楽祭'90武生実行委員会」では、議会、区長会、青年団、商工会など市町村内の各種団体の

代表者が実行委員として集められて発足している。

- このような団体の代表者の場合、当初は必ずしも劇場・ホールの活動自体に関心のある人ばかりではないが、逆に“地域の活性化”や“街づくり”といった視点で劇場・ホールの活動を捉え、ボランティア活動の可能性を幅広くみている傾向も見られ、興味深い。

ボランティアの募集頻度についても、随時受け付けている場合と定期的に募集を行っている場合によって以下のような状況が見られる。

● 随時受付

- 公募や口コミなどにより、新規ボランティアの参入を随時受け付けている例としては、「春日市ふれあい文化センター」がある。
- 「いまだて芸術館」の企画プロデューサーシステムは、企画提案方式で、企画書を随時受け付けている。
- 「AEスタッフ(いまだて芸術館)」の場合は、芸術館の柿落しに出演した町民劇団「綺羅星座」のために集められたウラ方スタッフが母体になっており、開館後の継続的な活動のために開館翌年度、追加募集をしている。

● 定期受付

- 同じ企画提案方式でも、「大阪府立青少年会館・プラネットステーション」の「チーフすたっふ」は年1回募集される。それに基づいて、「いべんとスタッフ」も年1回の定期募集となっている。
- ウラ方業務など技術的な知識・経験を必要とするボランティアでは、定期的な技術研修参加者をまず募集し、その修了生が実際の現場に立つ場合が多い。具体的には、「たんば田園交響ホール」のステージオペレータークラブ(ステージオペレータークラブ養成講座の修了者)、「中島町文化センター・能登演劇堂」のウラ方ボランティア(舞台芸術アカデミー)の受講生などがそれにあたる。
- 「たんば田園交響ホール」の「レディース21(女性のみの企画・制作型ボランティア)」は、2年任期となっているが、更新は可能。

⑥ 実費支給の考え方

● 実費支給の有無

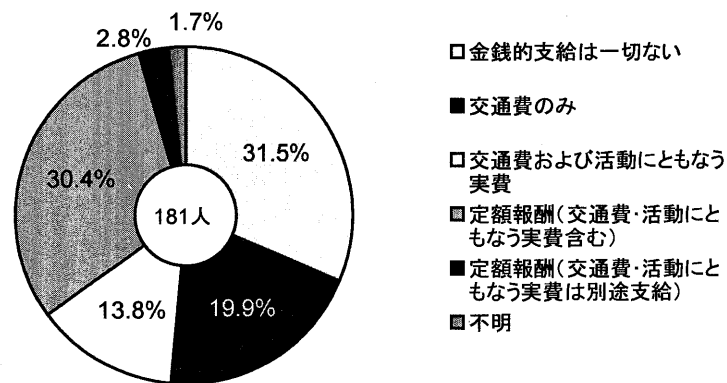
実費支給に対する考え方は劇場・ホール側によってさまざまであるが、業務内容による違いも大きい。

- 具体的には、「喜多方プラザ文化センター」の「舞台研究会うらかた」、「いまだて芸術館」の「AEスタッフ」、「たんば田園交響ホール」の「ステージオペレータークラブ」など、舞台のウラ方業務については“有償ボランティア”が主流である。

1. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

- ・実際、インタビュー調査の対象となった7事例では、30.4%が定額報酬を受けており、「お金のためにやっているわけではないが、多少の報酬が出ると、それだけ責任を感じる部分も否定できない」という意見も聞かれた。また「活動内容は専門的であり、公演内容によっては要求される技術も高いレベルになる」という状況からも、“専門技術提供”的要素に対する有償性は妥当と思われる。

■ 図表 I-13 実費支給の考え方



- ・「春日市ふれあい文化センター」では、運営サポート業務は時給770円を支給されるが、企画・制作業務は費用弁償はない、という切り分けをしている。企画・制作型のボランティアでは、「プラネット・ステーション」や「たんば田園交響ホール」で交通費相当分を支給しているほかは、ほとんど支給されていない。
- ・アンケート結果からは、「金銭的支給は一切ない」が31.5%となっている。特に、「能登演劇堂振興協会」、「武生国際音楽祭推進会議」など民間主導で自主的に活動している事例では、特別な場合*6を除き金銭的支給はないようである。

○ 支払い方法

- ・報酬の用途については、「喜多方プラザ文化センター」の“5%は「舞台研究会うらかた」事務局に戻入する”方式のように、一部をボランティア組織の運営費にまわしている例もみられる。
- ・「たんば田園交響ホール」のステージオペレーターは、「交通費+食事代」ということで一コマ1,500円、全日で4,500円が支給されているが、実際には半年間プールされ、弁当代を除いた金額がメンバーに配布されている。
- ・「いまだて芸術館」の「AEスタッフ」の場合は、自主事業と貸し館事業で仕組

*6 「武生国際音楽祭推進会議」では、ボランティアは無償ということで、当初は演奏家の送迎に関する東京や大阪までの交通費も自己負担していたが、現在はこうした経費については推進会議が実費を負担している。

みが異なっている。館の自主事業の際の活動に対しては、一事業・一人あたり5,000円が芸術館の予算の中から支払われる。ただし、これはAEスタッフ全体の収入としてプールされ、彼らの活動のために使われている。貸し館事業に対しては、一事業・一人あたり10,000円が事業の主催者館の利用者から支払われる。これは館のスタッフで対応しきれない場合に限定されるため、人数を館側から指定し、その報酬は個人に対する支払いとなる。

- また、「春日市ふれあい文化センター」では、サポート業務の時給770円は一旦「K's Crew」の会計係りが回収し、交通費+時給400円換算で計算し直して支払われるという仕組みになっている。

⑦ 研修制度について

図表 I -6でみると、研修制度の「ある」館が26、「ない」が15館となっているが、業務の内容、研修頻度、研修方法などそのありようはさまざまである。

● 業務内容

- 特別の技術を必要とするウラ方業務をボランティアに委託しているケースでは、技術研修を行っているところがほとんどである。事例調査を実施したなかでは、「喜多方プラザ文化センター」、「能登演劇堂」の舞台芸術アカデミー、「いまだて芸術館」、「プラネットステーション」、「たんば田園交響ホール」のステージ・オペレーター養成講座など、いずれも何らかの研修を行っている。
- また、オモテ方の業務を行っている「たんば田園交響ホール」の「レディース i」のスタッフについても、会場案内やもぎりのための研修が行われている。

● 研修頻度

- 定期的な研修制度を設けている例としては、「たんば田園交響ホール」のステージオペレーター養成講座、「能登演劇堂」の舞台芸術アカデミーがある。
- 「たんば田園交響ホール」のステージオペレーター養成講座は、現在第5期を開催しているが、週1回の講座が3~5ヶ月にわたって開催され、この講座の修了生が実際のステージオペレーターとして活躍することになる。講座はほぼ数年毎で、随時ホールの判断で開催して。
- 「能登演劇堂」の舞台芸術アカデミーは、毎年開催(年20回)されているが、受講者は基本的に初年度から継続している。
- 一方、「喜多方プラザ文化センター」では、「舞台研究会うらかた」の設立当初、プラザのオープニング前の半年間に集中して研修が行われた。現在も技術向上のために、定期的なプログラムが組まれており、照明操作の有資格者も少なくない。専門的な資格取得の費用は補助が出る。
- 「プラネット・ステーション」では、主催事業の一環に「技術講座」が組み込まれており、「基礎編」、「中級編」、「プラネット・テクニカル・スクール(照明・音

1. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

響・舞台の実践の場)」の三段階を年各1回開催している(1回は数日から10日程度)。館の主催事業なので、特に「いべんとスタッフ」に限った受講にはなっておらず、一般受講者もいる。

● 研修方法・内容

- 技術研修の方法としては、劇場・ホール内部で研修を行う場合が最も多いが、外部研修への参加や照明・音響などに関する専門資格取得を奨励しているところもあり、そのための補助を出している事例もある*7。
- 劇場・ホール内部で行われる研修では、既に現場で活動しているボランティア(研修の既修了生)、近隣都市の専門家、舞台設備納入業者などによる講義・実践のほか、他ホール・劇場の視察なども行われているようである。
- また、技術的な研修の他に、ボランティアの考え方や劇場・ホールの活動の方向性などオリエンテーション的なものもみられる。
- 企画・制作型ボランティアの場合には、特別な研修を行っている事例はほとんどないが、「たんば田園交響ホール」では、“ボランティア・スタッフは、感性の向上のためどの公演も無料で鑑賞できる。”という方法を採用している。

⑧ 保険について

ボランティア参加者の保険については、特に「ウラ方」業務を行っているボランティアのほとんどが何らかの保険に加入しているが、どのケースにもあてはまる保険はなく、各々業務内容を保険会社と個別に相談して対応しているようである。

- 「舞台研究会うらかた(喜多方プラザ文化センター)」では、年間20回以内の業務を対象とし、20人までに対応できる保険(年間24万円)にホールとして加入している。10年前にはこのような保険はなかったため、民間保険会社に新たな商品をつくってもらった。
- 「大阪府立青少年会館・プラネットステーション」では、各イベント20名の補償に対応できる、“イベント保険”に加入している。
- 「春日市ふれあい文化センター」では、イベントごとに最大15人まで対応できる保険に加入。春日市民は全員がボランティア保険に加入しているが、それでは対応できないということで、内容を更に保険会社と相談して決めた。
- 「武生国際音楽祭推進会議」のように、業務が短期間に集中的に増えるものでは、“音楽祭開催中”に限って“ボランティア保険”を掛けている。
- 一方、「いまだて芸術館」のAEスタッフは、いまだて町の職員が加入している市町村共済組合のなかの団体保険という位置づけで、“非常勤公務員災害補償制度(損害保険)”に加入している。

*7 「たんば田園交響ホール」の「ステージオペレータークラブ」では、講座の受講料については10000円まで、交通費のみの場合は50%までの補助、観劇等の視察研修は、1人年1回、50%(上限は3000円)までがクラブから補助される。

(2) ボランティア参加者の意識

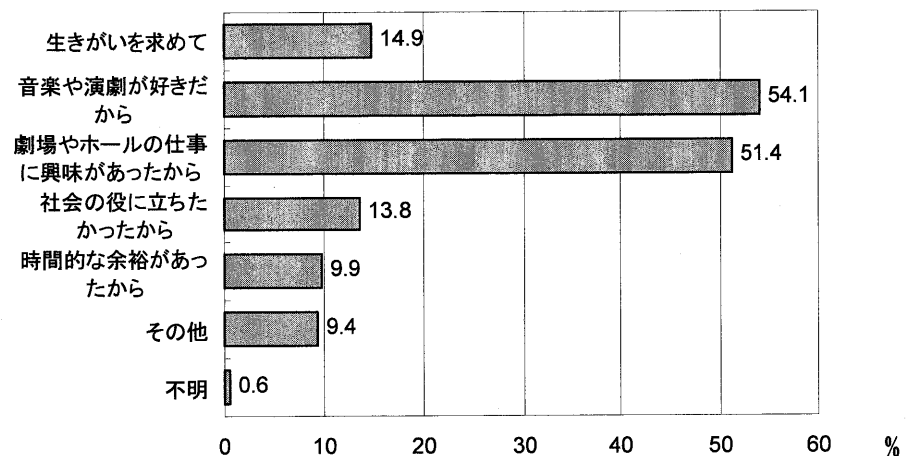
次に、ボランティア活動の実態を参加者側の立場から見てみたい。

① 参加の動機

ボランティアに参加した動機としては、「音楽や演劇が好きだから」(54.1%)、「劇場やホールの仕事に興味があったから」(51.4%)が上位を占め、一般的なボランティア活動の動機としてみられる「生きがいを求めて」や「社会の役に立ちたかったから」などの理由は10数%に過ぎない。

同様の傾向が美術館ボランティア^{*8}にも見られ、いわゆる“社会奉仕的”なものではなく“個人の興味関心の充足”的な部分が動機づけにつながっている点は、「文化ボランティア」の特徴と言えよう。

■ 図表 I-14 ボランティア活動を始めた動機



インタビュー調査でも、ボランティアへの参加にはさまざまな理由が聞かれたが、「もともと芝居に興味があった」、「昔、劇団にはいっていて、転居などにより継続する機会がなかった」、あるいは「現在もダンスをやっている」など、個人的な興味・関心による答えが最も多かった。実際、芸術関係の仕事に就きたいと思っても雇用の機会は限られているため、何らかの方法で劇場・ホールと関わりを持ちたい、という声もあった。

また、学校や会社など限定された社会でなく、「それ以外の人的ネットワークを拡大したかった」という意見も聞かれた。

さらに、「能登演劇堂振興協会」や「武生国際音楽祭推進会議」のように、地元団体の代表が集まってボランティア組織の基盤ができている場合には、「音楽祭自体には特別な思い入れはなかったが、街おこしの材料になる、ネットワークを拡

^{*8} 前掲の「文化行政とボランティアに関する調査報告書」によれば、美術館ボランティア活動を始めた動機は「美術に興味があったから」(69%)、「自分の勉強になる」(54%)が上位を占め、「社会に役立ちたい」(33%)、「時間に余裕ができた」(16%)と続いている。

I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

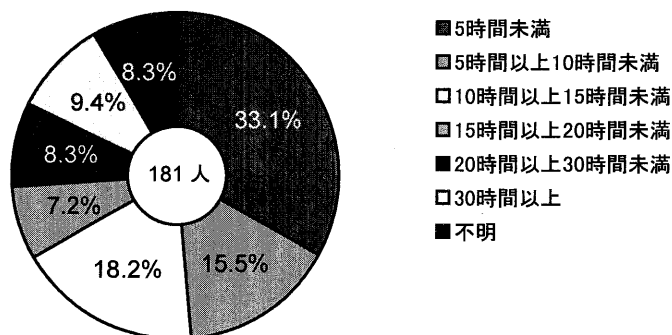
大できる、あるいは子供達の感性の育成につながるなど、派生的な要素に可能性を感じた」という意見も聞かれ、“地域をどうにかしたい”という視点でボランティア活動の意義を見出して参加している人もいる。

② ボランティア活動の頻度

活動の頻度は、ボランティアの位置づけ、業務の内容や個々人の関わりかたなどによってまちまちであるが、アンケート調査からみた平均は月間11時間半という結果が出ている。

- ・「武生国際音楽祭推進会議」や「プラネットステーション」のように、フェスティバルなど短期間に業務が集中する場合には、月間30～40時間などというケースも珍しくないようである。プラネットステーションの平均活動時間は月間25時間弱で、7事例の中でもっとも多い。「イベント開催中はほぼ毎日、何もなくても週1回は顔を出す」という声もあった。

■ 図表 I -15 ボランティア活動に従事する時間(月間)



- ・「たんば田園交響ホール」のように、登録されているスタッフ数が多い場合には、一人当たりの活動時間はそれほど多くない。「たんば」のステージオペレーターは90名近くが登録されており、年間平均出役日数は約8日。ボランティア全体でも41.4%が「月間5時間未満」と回答している。
- ・また、「喜多方プラザ文化センター」や「いまだて芸術館」のウラ方スタッフなど、技術を必要とする業務では、活動の頻度によって技術面に格差が出てしまい、技術を取得している人は実際に公演を手伝う機会も増え、更に活動頻度の格差が広がるという点も指摘されている。

実際の業務以外に、研修会・勉強会・懇親会などに要している時間は、平均で5.6時間程度。各ボランティアが個別に活動をしているため、月1～2回程度の「月例会」などを設けて、相互のコミュニケーションを図っているようである。

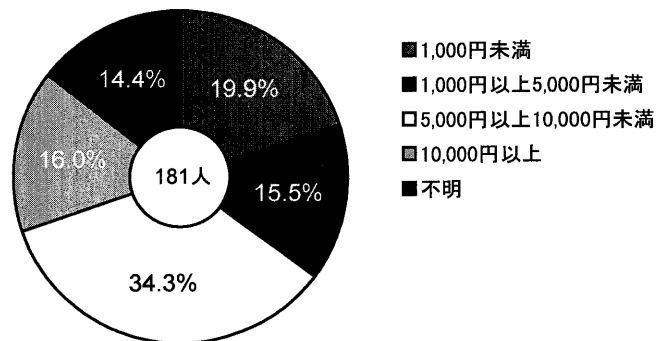
活動が部門別、企画別になっている事例では、各々のグループの代表同士(音響・照明部長、企画プロデューサーなど)は更に頻繁に集まって進捗状況の報告や調整を行っている。

③ ボランティアの自己負担

アンケート結果からみたボランティアの年間自己負担金は、「5,000円以上10,000円未満」が34.3%と最も多く、「1,000円未満」が19.0%と次に続く。

- 若年層が中心の「春日市ふれあい文化センター」では、42.9%が「1,000円未満」と回答しており、自己負担の少ない事例といえる。一方、同じ青少年対象の「大阪府立青少年会館・プラネットステーション」では「1,000円以上5,000円未満」(25.0%)、「5,000円以上10,000円未満」(37.5%)が多数を占めている。
- 「武生国際音楽祭」では、「5,000円以上10,000円未満」が38.7%、「10,000円以上」が25.8%となっており、高額負担者が最も多い。「同推進会議」のうち、特に理事の重要な役割は資金調達で、自ら年間20万～50万円を拠出している人も珍しくない。「理事の最大の責任は赤字の負担。年会費の他に、アーティストや関係者の接待、チケットの販売、協賛金集め(広告10万円/1ページ)を行ない、自らも協賛金を出す」という活動で、費用負担もさることながら、それに要する時間も相当なものであろう。

■ 図表 I-16 ボランティアの自己負担金



④ 満足度

ボランティア活動に対する満足度を「ボランティア活動をして良かったと感じる点」の設問で聞いた結果が、下記のグラフである。

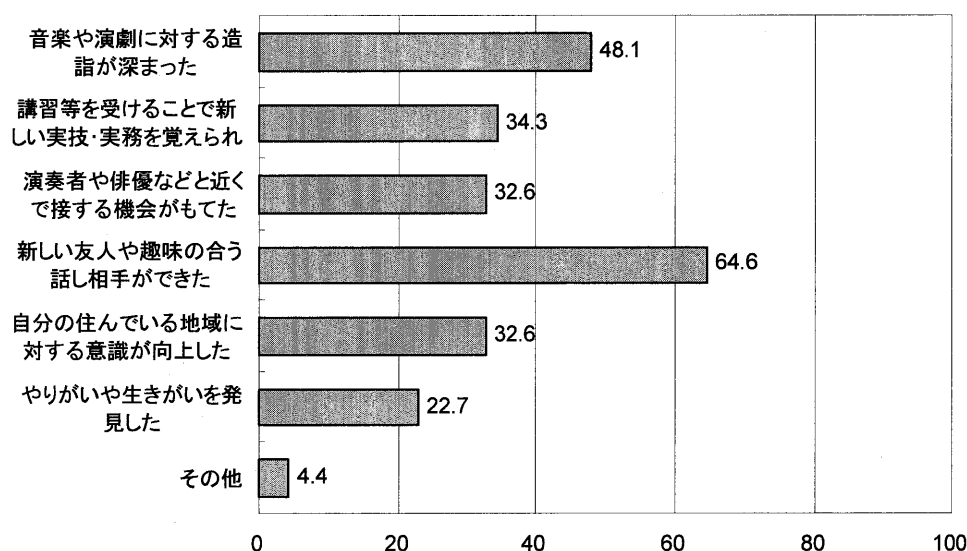
全体の64.6%が「新しい友人や趣味のあう話し相手ができる」ことを良かった点にあげている。活動を始める時点では、「音楽や演劇が好きだから」あるいは「劇場・ホールの仕事に興味を持って」が主な動機だったが、実際に活動をはじめた時点では、関心事を同じくする友人・知人との出会いが満足感・充足感を感じる大きな要因になっている。

インタビュー調査でも、それまでの経験や年齢、職場環境などが全く異なる新しい人との出会いを「満足している」としている人は多く、企画・制作系のボランティアでは、「これまで個人でしてきた活動の範囲が広がった」、「この活動をしていなか

I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

ったら、出会っていない人、やっていないことは仕事の何十倍もある」あるいは「“やればできる”と思えるようになったし、ネットワークの重要さも学んだ。自分個人では全く不可能なことが、その組織では可能になるのは素晴らしい」などの意見が聞かれた。

■ 図表 1-17 ボランティア活動をして良かったと感じている点(〇は3つまで)



同じように、「音楽や演劇に対する造詣が深まった」点を評価している人も48.1%いる。「プラネット・ステーション」のように、音楽・演劇以外の分野の活動も行っているケースでは、「芝居がしたいと思って来たが、美術や音楽など他の分野に関する知識も得るようになり、興味をもつ範囲が広がって面白くなった」という感想も聞かれた。

また、ウラ方系のボランティアをしているところでは、「実技・実務を覚えられた」点が評価されており、全体で34.3%という数字が出ている。ウラ方に特化している「舞台研究会(喜多方プラザ文化センター)」では62.5%、「ステージオペレータークラブ(たんば田園交響ホール)」では51.4%が、技術的向上を良かった点にあげている。

(3) ボランティア運営における課題

最後に、ボランティアの運営における問題点や課題を整理してみたい。

① 劇場・ホール側からみた問題点・課題

● ボランティアの位置づけとメンバーの意識

- ・ボランティア参加者の“意識”が必ずしも統一されていない面があり、プロフェッショナルとアマチュアの間領域に位置している。ウラ方業務のように危険

を伴うものや報酬を得ているものについては、特にプロ意識が要求される。「プロなのかアマチュアなのか、見る側と本人とで意識にずれがあり、トラブルになることがある」と指摘する担当者もいる。

- また有職者や学生が多く仕事を終えた平日の夕方などに活動しているボランティアの現場では、「時間に遅れる、連絡なしに来ないなどのために、予定していた作業が進まない」という意見も聞かれた。

● メンバーの固定化

- 新人の加入が少なく、メンバーが固定化する傾向が指摘されている事例もある。10年以上も活動している「喜多方プラザ文化センター」では、「あまりに第一世代のホールに対する思い入れが強いせいか、後に入ってくる新人にその想いを伝えられないでいる」という。
- また、メンバーに登録はしているものの、実際に頻繁に活動するメンバーは、時間的な問題や技術の格差から限定された少数になってしまう例もあった。
- メンバーの年齢層がある部分に集中している組織では、ボランティアの継続的な活動のためにも、「世代交代」への対応策を検討しておくべきではないだろうか。

② ボランティア参加者から見た問題点・課題

ボランティア参加者の側から見た問題点については、以下のような点があげられている。

● 研修や講習の充実

- アンケート調査結果では、「研修や講習をもっと受けたい」が27.6%で最も多い。これについては、現状で十分な研修が行われていないという見方と、経験を重ねるにつれてボランティアの要求が高度化・専門化している向上心の表われであるという見方ができよう。
- 「喜多方プラザ文化センター」では、前述のとおり「技術面の向上を満足している点にあげた割合が62.5%と最も高かったものの、「研修や講習をもっと受けたい」を問題点にあげている割合も33.3%と高い数字になっており、後者の例といえる。
- 事例別での研修や講習への要望は、ボランティア制度を導入して2年目の「春日市ふれあい文化センター」が71.4%で最も高く、今後の活動の広がりが期待される場所である。

● 業務量の適切配分

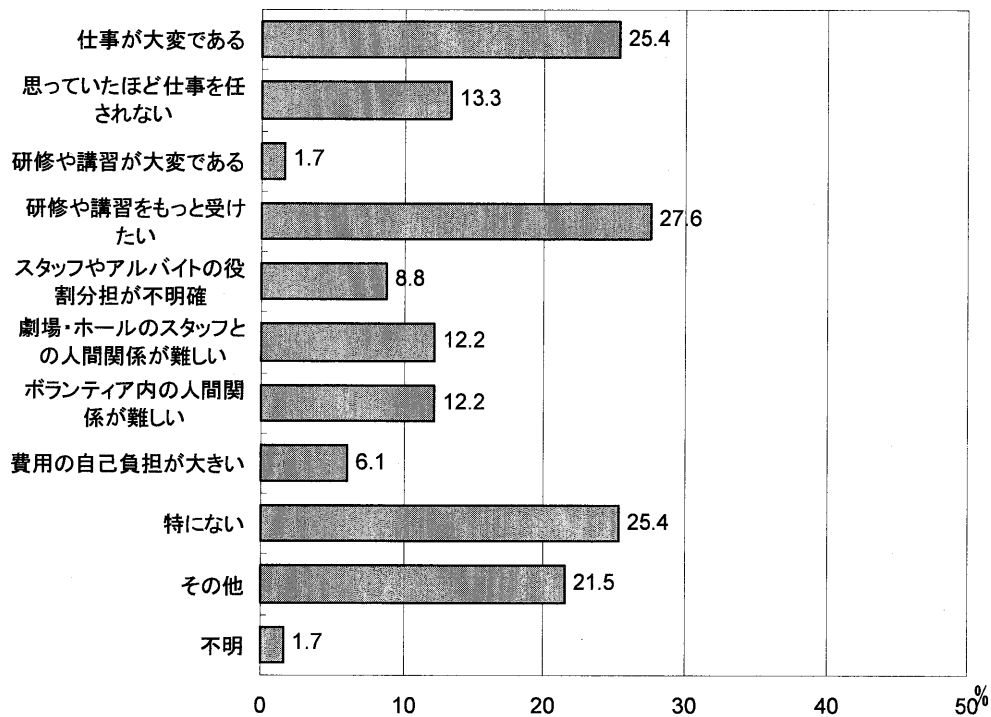
- 「仕事が大変である」と答えた人も25.4%おり、短期間に業務が集中する「武生国際音楽祭推進会議」では54.8%がそのように答えている。逆に「春日市ふれあい文化センター」では、57.1%が「思ったより仕事を任されない」と回答

1. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

しており、予想や期待と現実のギャップが現われている。

- ・「いまだて芸術館」の企画プロデューサーの意見では、国内外のアーティストへの対応や事業の事後処理、個別の作家の要求への対応など、「活動の規模が大きくなればなるほど問題も拡大する」点を指摘するものもあった。業務範囲の拡大にともない責任の範囲が広がることによって、ボランティア内部で対応すべき問題点も増大するというであろう。

■ 図表 1-18 ボランティア活動で抱えている問題点、期待と違った点(〇は3つまで)



● 活動時間の確保

- ・ボランティア活動をしたい気持ちがあつて登録をしているものの、その時間を確保するのに苦慮している声も多く聞かれた。
- ・具体的には、有職者が 3/4 を占めるという劇場・ホール系ボランティアの特性からもわかるとおり、「時間的にボランティア活動のための余裕がない」、「自由業なので仕事の時間を削ってボランティアをしている」、「土日にボランティア活動をすると休みがなくなってしまう」などという内容である。中には、「活動時間が夜間になったり長くなったりするため、家族の理解が必要」、「子育て中で、夕方の外出が難しくなった」という意見もあった。

このような状況のなかで、「特にない」という回答が25.4%あり、全体の1/4は現状にほぼ満足しているという見方ができる。

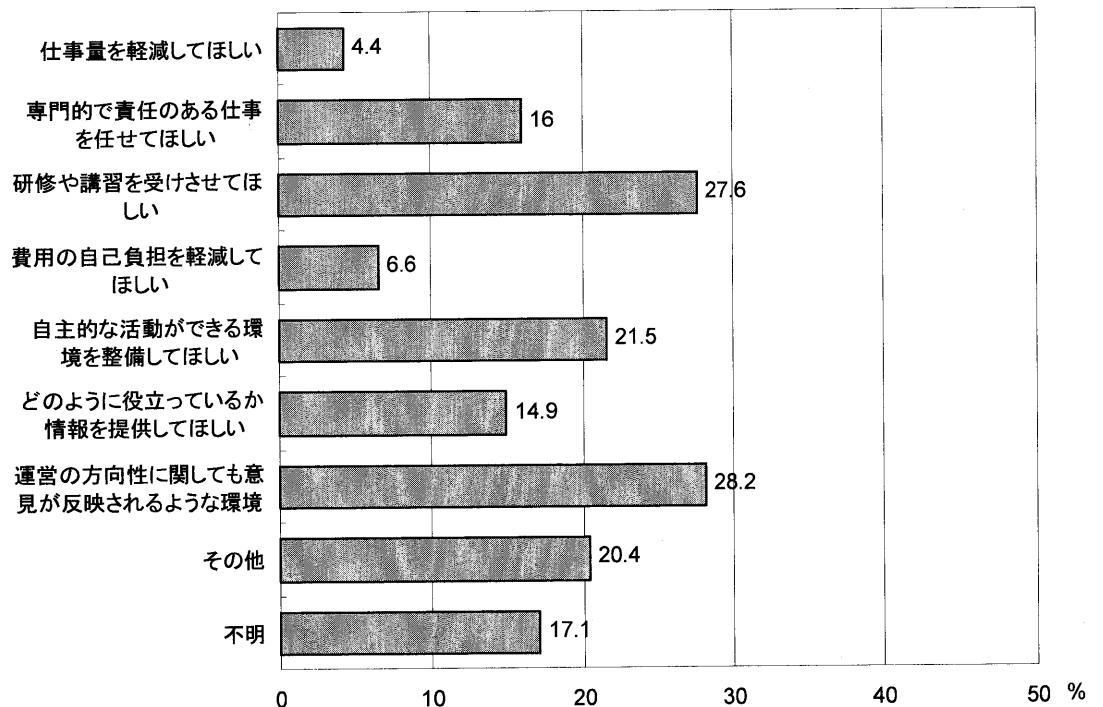
③ 活動に対するボランティア参加者の要望

前項の「ボランティア活動における問題点」をもとに「現在のボランティア活動に対する要望」を聞いた結果が図表 I -19である。

● ボランティアの位置づけの明確化

- ・「運営の方向性に関しても意見が反映されるような環境を整備してほしい」が28.2%、次いで「研修や講習を受けさせてほしい」が27.8%、「自主的な活動ができる環境を整備してほしい」が21.5%と、いずれもより積極的な関わりを求めている状況がうかがえる。
- ・このように、劇場・ホール側がボランティア制度導入の際に、「ボランティアは成長する」ことを視野に入れておくべきであり、またその向上心を積極的に活用できる体制を整備することが重要であろう。
- ・また、ボランティア側の要求が次第に高まっていくなかで、劇場・ホールそのものの運営の方向性が明確にボランティアに伝わっていると同時に、その中での自分たちの位置づけが明確に認識されていることも重要である。

■ 図表1-19 ボランティア活動への要望



● 研修の充実、技術格差の是正

- ・研修の充実については、特に技術面の向上に対する要望が強く求められている。高度化する主催者の要求に対し、現状の技術では対応しきれないものもあり、より一層技術的な対応力を高めたいという要望がある。職業として毎日あるいは定期的に当該業務に携わることができないため、「しばらく来な

I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

いと、「カン」がなかなか取り戻せない」という声も聞かれた。

- また、活動を始める時点での経験やその後の活動頻度によっても、ボランティア内部で技術格差が生まれ、実際の現場に対応できる層が限られているといった点も指摘されていた。
- 技術面の研修は、現場で先輩のオペレーターから教えてもらって習うという部分も少なくないが、「新しい人をさそっても、なかなか徒弟制度的な体制にはついて来れず、長く続かないのが現状。世代間のギャップもあるかもしれない」という声も聞かれている。
- 個人レベルでの技術研鑽を積むことで、ボランティア全体としての対応力を高める努力が望まれるところである。

○ 業務量と費用負担

- ボランティア活動が期待と違っている点について「仕事が大変である」をあげた割合は25.4%であったにも関わらず、「仕事量を軽減してほしい」との回答は4.4%にすぎない。逆に「専門的で責任のある仕事を任せて欲しい」が16.0%もある。
- 一方、費用負担については「費用の負担が大きい」との回答が全体で6.1%（「武生国際音楽祭推進会議」で16.1%、「プラネットステーション」では25.0%）あり、「費用の自己負担を軽減してほしい」と回答しているのは6.6%（「武生国際音楽祭推進会議」で9.7%、「プラネットステーション」では25.0%）である。
- ボランティア活動を始めた当初は、前向きなエネルギーのために多少の業務量や経費も負担に感じないが、何らかのマイナス要因によってそのエネルギーが摩耗してきた時に、費用負担が二次的な要因になってボランティア活動そのものを継続する意志が薄らぐことも考えられる。業務の量については、少々大変なほうが「思っていたほど仕事を任されない」よりもやりがいを感じられるが、現実的な費用負担については限度がある、というのが現状のようである。